岸本佐知子『死ぬまでに行きたい海』

間室道子

なんてさびしいんだろう、と最初驚いた。

岸本佐知子さんのエッセイといえば形容詞として“ユーモア”や“愉快な奇想”が思い浮かぶ。いままでの一連の『気になる部分』『ねにもつタイプ』『なんらかの事情』『ひみつのしつもん』はまさにそう。本書は初の「くくり」を設けたエッセイ集で、テーマは「場所」だ。ある時期足繁く通っていたり、いつか行きたいと思っていたりのところを訪ねる。また、かつて旅した地に思いを馳せる。でもどうしてこんなにさびしいのか。

ヒントになりそうな文章が「四ツ谷」にでてくる。自らの再訪について、こうある。
「今日は記憶喪失の患者をゆかりの場所に連れてくるようなつもりでここに来た。現地に立てば何か思い出すかもしれない。でも気が進まなかった。記憶喪失者が何かを思い出して幸せになることはまずない。」

四ツ谷には岸本さんが通った大学があって、4 年間の記憶はかき集めても 3 日ぶんくらいしかなく、ただ何となくぶざまだったという印象だけがあるそうだ。でもうっすらネガな町だけではない。子供時代、好きすぎて帰るのがいやだと毎回泣いた丹波篠山にも、初めて行く謎の駅「ＹＲＰ野比」にも、「記憶喪失者の旅」のような雰囲気がある。

私が好きなのは「海芝浦」。ある小説の舞台である海芝浦駅に行こうと思って 20 年がたち、ようやく実行にこぎつけた。しかしその後、見てきた海芝浦とさんざん想像してきた海芝浦が岸本さんの脳内でせめぎ合い、そこに今なお彼女を呼んでいる「本当の海芝浦」が加わるのである！

過去の郷愁、未知へのあこがれ、実際の探訪、そして現実を見たからといって消えてしまわない降り積もった空想。これらのないまぜが、本書に漂うさびしさの正体なのかもしれない。すでにすぐ近くにいる人に「あなたがここにいてほしい」とはならない。届かないものに手を伸ばす。それが「恋しい」だ。

いや、正体なんかつきとめなくていいのだ。読んでいると気持ちがしーんとし、やがて心やすらかになってくる。今は「むなしいとか悲しいはだめ。すぐつながろう」が重要視される時代だけど、さびしさがもたらす意外なほどのやすらぎに、身をひたす。そんな 22 編。おすすめです。